

子どもとする哲学（p4c）とは何か？ —共に考え、主体化するための教育理論とその実践—

「え、なんですって？」アリスはきよとんとした顔だ。
「きいたってかまわんよ」とハンプティ・ダンプティ。
「あ、う、不誕生日のプレゼントって、なにかと思って」
「誕生日でない日にもらうプレゼントだよ、もちろん」
（ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』）

p4c と私——自己紹介に代えて

- ・川上英明（専門：教育哲学・教育思想史）
- ・2016年3月 宮城教育大学卒業→川崎惣一先生、田端健人先生
- ・2016年4月 東京大学大学院入学→小玉重夫先生、齋藤元紀先生、神戸和佳子さん、堀越耀介さん
- ・2014年あたりから現在まで、何の因果か p4c と関わり続けてきた…

はじめに

- ・「民主主義には、相手の声に耳を傾けることの価値や誰に対してもインクルーシヴであることの価値に加えて、すべての人が自分の気持ちや意見を聞いてもらえるという共通の価値が存在します。」（アルネール・ソーレマン 2021：9）
- ・本講座の構成
 1. p4c とは何か？ …歴史、理論、実践方法
 2. p4c を通して、共に考え、主体化する
 3. ある実践例とその教育的「効果」

1. p4c とは何か？

- ・ philosophy for/with children（p4c、子どものための哲学、子どもとする哲学）

【歴史】

- 1960年代 マシュー・リップマンが開発
- 1974年 子どもの哲学推進研究所（IAPC）設立→国際的な普及
- 2000年代 関西圏で実験的な導入
- 2010年代 首都圏の私立小学校、中学校での導入
- 2011年 東日本大震災→宮城県での p4c 普及（p4c みやぎ・出版企画委員会 2017）
- 2018年 日本哲学プラクティス学会設立

【理論】

- ・探究の共同体（リップマン 2014）
 - おしゃべりではないし、「みんな違ってみんないい」でもない。
- ・セーフティーであること
 - 安心して発言できること。特定の人物を傷つける発言は禁止。

【実践方法】

Step1. コミュニティボールをつくる

・準備物：毛糸、サランラップの芯、結束バンド、ハサミ

1. 参加者全員で円になって座る。
2. 筒に毛糸を巻きつけながら、全員が自己紹介をしていく。
※一周する間にすべての糸を筒に巻きつけるようにする。
3. ぐるぐるに巻かれた毛糸を結束バンドで固定する。
4. 結束バンドで固定されていない側の毛糸をハサミで切り、ボール型に整える。



Step2. 問いを立てる

- (A) 子ども同士で出し合う →いくつか候補を出し、多数決で問いを決める
- (B) 大きなテーマに沿って子ども同士で出し合う →主催者が「自由」「平等」「愛」などのテーマを決め、子ども同士でそのテーマに沿った問いを決める。
- (C) 複数の問いから選ぶ →主催者が事前に3つほど問いを考え、選ばせる。
- (D) あらかじめ決めておく →一般的な哲学カフェなどでよく用いられる方法。
- (E) 素材をシェアして子ども同士で出し合う →読み物や動画、映画などをシェアして、その感想や質問を集めて具体的な問いの形に落とし込む方法。

Step3. 対話のルールの確認

- ・ボールを持っている人だけが発言できる。
- ・話し終えたら、話したい人にボールをパスする。
- ・発言を強要、催促してはいけない。
- ・考えがまとまらない時は黙って考えてもよいし、他の人にボールをパスしてよい。
- ・他人を傷つけることは言わない。

Step4. 探究する

- ・コミュニティボールをパスしあいながら、問いについて対話する。
- ・対話による探究のポイント
 1. ゆっくり取り組む（沈黙 OK、早口×）
 2. お互いの意見をよく聞き合う（質問して相手の意図を知る）
 3. 変化を楽しむ（ディベートではない。自分の意見が変わることを面白がること）

☆教師の役割：ファシリテート（対話を円滑に進めること）

- ・参加者の意見に論理的な間違いがあった時には、質問して間違いに気づかせる。
- ・意見を言うより、質問して対話を深めていく。
- ・議論が抽象的になっているときは、具体例を考えさせる…など

Step5. 振り返る

- ・プリントに記述する方法／対話形式で振り返る方法
- ・問いに対する答えを出すのではなく、モヤモヤを大切に（オープンクエスション）

2. p4c を通して、共に考え、主体化する

- ・ジャン＝ピエール・ポッツィ監督『ちいさな哲学者たち』

自分と異なる意見の子どもを叩いてしまう場面…

「人と意見が違うこともある。だからってたたくのは解決にならない。まず話すの」

→他者：自分とは異なる背景（歴史）をもち、異なる意見や思考をもつ存在者

→他者と向き合い、傷つける／傷つけられるほどの切実さをもった時に、対話による主体化が起こる。

- ・フーコー「主体化＝服従化」（フーコー1977）⇔他者との対話による「主体であること」

「主体として存在するという事は、実際には、他なるものや他者との進行中の「対話の状態（state of dialogue）」にあることであり、もっと言えば、この場合、主体であること（subject-ness）は、完全に構成されたものではなく、すなわち私たちの意図や欲望から構成されたものではなく、私たちに話しかけ、語りかけ、呼びかける、つまり私たちを呼び覚ます他なるものや他者への応答やかかわりの仕方と密接に結びついているものである。」（Biesta 2017: 3=2018: 4, 一部改訳）

3. ある実践例とその教育的「効果」

- ・2022年度後期 山梨学院短期大学専攻科講義科目「教育哲学」 哲学ウォークと p4c の実践

※哲学ウォークについては、ハーテロー（2014）と桂ノ口（2017）を参照

- ・受講生へのアンケート調査

「もし自分が保育者だとしたら、「子どもの哲学（p4c）」のような対話の活動を自分の保育に取り入れたいと思いますか。」 → 「はい」16名 「いいえ」2名

- ・「いいえ」の理由

- ・自分が哲学対話の経験もなく、とりしきることが難しいから。
- ・幼児には、難しい。先生側の分かりやすい説明や言い換えが必要になってくる。

- ・「はい」の理由

- ・小さな内から自分の頭で考える経験をして、思考力をつけて欲しいため。
- ・私自身講義の中で行ってみて普段考えた事のないことだったので、新たな発見や考えを持つことができ、良い経験になったから子ども達にもそのような感情を抱いてほしい。
- ・子どもの持っている発想や、普段こんなことを思っていたのかということが一人一人わかるなと思ったから。保育は、先生対子どもが主流だけど、子ども同士の話し合いの活動は見たことないし、普及したら面白そうだから。

「「子どもの哲学（p4c）」を教育や保育の実践方法として捉えると、どのような意義があると考えられますか？」

・自分の言葉で自分を表現する力の育成、目と耳を使って周りの人の話を聞くことの習慣づけ、他人の考えを受け入れようとする気持ちの育成など、対人関係において重要な力を身につけられると思う。

・子どもが考え言葉を発するという事は簡単なことではないと思う。逆に言葉を発さずに聞き頭で考え続けるということも簡単なことではないと思う。しかし、いつもは聞かない人の考えを真剣に聞くことで、相手に対する新たな発見があったり、自分の考えを改めたりということが自然にできるのがこの哲学対話だと思います。

∴p4c の教育的「効果」と考えられること…

☆言葉による表現力、他者の話を聞く習慣づけなどの対人関係における力の育成

☆他者の話を聞くことで自分の考えが改まる（変化する）可能性

「言葉による表現力」の意味

「授業内で先生 [引用者注：川上] が発表しなくても頭の中で考えて参加することが大切とおっしゃっていて、私は哲学ウォークや恋、なぜ教師と生徒が縛られるかなどを考える時もたくさん頭の中では考えていたけれど発表があまり得意ではないからすごく救われた気持ちになった。」

- ➡探究の共同体：参加者は他者の意見を聞きながら、時には発言し、時には沈黙考する。
- ➡対話終了後、振り返りシートを用いる：書くことによる「言葉の表現」も表現の一つ
- ➡どのような方法であれ、「共に考え、主体化する」ことができればよい。

民主主義のための p4c——まとめに代えて

「民主主義は単なる政治形態でなく、それ以上のものである。つまり、それは、まず第一に、共同生活の一様式、連帯的な共同経験の一様式なのである。」 (Dewey 1980: 93=1975: 142)

- ➡「生き方 (way of life) としての民主主義」 (Dewey 1988)

☆p4c の実践を通した「共に考え、主体化する」という経験

- ➡他者の話を聴き、他者に話を聴かれるという経験を通した生き方としての民主主義

☆p4c 関連の書籍・情報サイト☆

- ・こども哲学おとな哲学アーダコーダ『こども哲学ハンドブック』アルパカ、2019年
 - ➡これ1冊あれば p4c を実践できます。
- ・豊田光世『p4c の授業デザイン』明治図書、2020年
 - ➡小学校以上の実践者向け
- ・「P4C in school KANSAI – JAPAN」 (<https://kansai.p4c-japan.com/>)
 - ➡p4c に関する情報がまとまっている Web サイト
- ・NHK よるドラ『ここは今から倫理です。』
 - ➡神戸和佳子さんが倫理考証で参加。作中で哲学対話のシーンあり

参考文献

- Biesta, Gert (2017) *The Rediscovery of Teaching*, Routledge. (上野正道訳『教えることの再発見』東京大学出版会、2018年。)
- Dewey, John (1980) *The Middle Works, vol.9, Democracy and Education*, Southern Illinois University Press. (松野安男訳『民主主義と教育』上巻、岩波書店、1975年。)
- Dewey, John (1988) *The Later Works, vol.14, Creative Democracy - The Task Before Us*, Southern Illinois University Press.
- アルネール, E., ソーレマン, S. (2021) 『幼児から民主主義』伊集守直・光橋翠訳、新評論。
- 桂ノ口結衣 (2017) 「実践ノート：まちかね保育園 p4c 「てつがくワーク」」 参照：<http://p4c-japan.com/wp-content/uploads/2017/12/p4cphilosophywork.pdf> (最終閲覧日：2023年1月28日)
- ハーテロー, ピーター (2014) 「哲学ウォーク」『立教大学教育学科研究年報』第57号、河野哲也監修、西山溪・渡邊文訳、107-114頁。
- p4c みやぎ・出版企画委員会著、野澤令照編 (2017) 『子どもたちの未来を拓く探究の対話「p4c」』東京書籍。
- フーコー, ミシェル (1977) 『監獄の誕生：監視と処罰』田村淑訳、新潮社。
- リップマン, マシュー (2014) 『探求の共同体：考えるための教室』河野哲也ほか監訳、玉川大学出版部。